

学校サポート活動について

1) 大阪府教育委員会との連携と学校サポート活動

平成14年7月に大阪教育大学は大阪府教育委員会と連携・協力に関する協定書調印をした。これを機に、大阪府教育委員会は学生を活用する「まなびング・サポート事業」を提案し、大阪教育大学に協力を求めてきた。この経過については平成15年3月14日の教授会において配布された「学生部関係の課題に対する取り組み(報告)」によって学長より説明されている。この頃すでに関西では大阪大学、大阪市立大学、立命館大学、武庫川女子大学・同短期大学、相愛大学、常盤会短期大学などが学生を教育現場に送る活動を開始していたが、全国的にみると他の教員養成大学や教育学部は平成11年の教員免許法改正の時期に(あるいはそれ以前に)教育実習の改正をカリキュラム改正と共に実施している。

大阪府が提案した「まなびング・サポート事業」の趣旨は、「つまづきの克服、発展的な学習、自学自習力の育成をねらいとして、子どもからの学習相談や個別指導などの取り組む学校を支援するため、大阪教育大学をはじめとする教員養成系大学等と連携し、意欲や情熱をもった大学生を『まなびング』サポーターとして小・中学校に派遣し、教員と大学生サポーターとの協力指導体制による児童生徒の確かな学力の向上を図る」というものであった。これを受けた当時の「教育委員会等連携プロジェクト・チーム」はこの事業内容を検討し、実施に至るまで活動内容、実施手順等さまざまな局面について議論し、大阪府教育委員会と交渉した。結果、大阪教育大学としてはこの活動を「学校サポート活動」と名づけ、次のように位置づけて取り組むこととした。

「学生が教育実習前に教育現場の諸活動を経験することは、将来教員を目指す学生にとって得がたい学びの場となる。つまり、学生はこの活動に参加することによって、教育現場の実態を知り、社会性を身につけ、教育理論と実践の接点を体験し、子どもとのコミュニケーション経験等について学ぶ機会を得る。現在、学生が教育実習以外に教員と共に教育現場に入っているのは『教職入門セミナー』だけであり、これは観察であって教員と一緒に活動するものではない。この活動を学生に紹介するにあたり、単なるボランティア活動ということにとどまらない教育的な意味をもったものとして捉え、教育実習につながる活動としての意義をもつものとする。」

大阪府教育委員会との連携によって実施するに至った「まなびング・サポート事業」は大阪府教育委員会の主催するボランティア活動のみならず、将来のより広範な学生の教育現場での活動をみすえ、さらには教育実習の改革を目指すための「学校サポート活動」として開始されたのである。

2) 学校サポート活動実施状況

(1) ガイダンス

教育実習専門委員会では、4月初旬の専攻別ガイダンスに際し、各専攻に学校サポート活動に関する紹介を依頼している。平成17年度は、学校サポート活動のガイダンス案内と平成15、16年度の活動報告(表裏)の2枚の資料を配布した。

教育実習専門委員会では、4月中旬以降、学校サポート活動ガイダンスを実施している。今年度はガイダンスを受けた学生にその場で『学校サポート活動・サポーター登録カード』

の記入を依頼し、出席のチェック材料とした。最も多くの学生が集まることが予想された第1回目のガイダンスでは、ガイダンスとともに昨年度の活動報告を行い、平成16年度の学校サポートシンポジウム報告書のコピーを配布した。このガイダンスを含め、平成17年度には以下の4回のガイダンスを行った。年々学校サポート活動の知名度が上がってきているので、いずれのガイダンスでも100名程度かそれを大きく上回る数の学生が受講した。ガイダンスでは、ガイダンスプログラム、サポーター登録カード、サポート内容、学校サポート活動の流れ図、サポート活動の支援グループの紹介、サポーター心得、活動の記録、活動の記録(記入例)、学校サポート活動用ファイルの使い方(ポートフォリオ例)、確認書を配布した。(これらについては、平成16年度教育実習専門委員会活動報告書 p.72-81を参照)ガイダンス日程は以下のとおりである。

第1回	ガイダンス	4月20日(水)	13:00-13:40	A-215
第2回	ガイダンス	4月25日(月)	12:30-13:00	A-306
第3回	ガイダンス	5月12日(木)	12:30-13:00	A-306
第4回	ガイダンス	10月5日(水)	12:30-13:00	A-306

(2)サポート活動の支援体制

①学校サポート活動支援グループ

学校サポート中に、何らかの問題があったとき、学校サポート活動支援グループに相談を受けることになっている。学校サポート活動支援グループは教育実習専門委員会の中におかれた学校サポート活動ワーキンググループが担当することにした。担当者は以下のとおりである。

井坂 行男	(障害教育講座)
馬野 範雄	(教育実践総合センター)
鈴木 康文	(理科教育講座)
高橋 一郎	(実践学校教育講座)
安福 純子	(教育実践総合センター)

②個別ガイダンス

学生が学校サポート活動ガイダンスとして設けたいずれの日も都合がつかず、これに参加できなかった場合、学校サポート活動支援グループの一人が個別ガイダンスを行う。平成17年度も、前期には多くの学生が個別ガイダンスに訪れ、後期には何件かの相談が寄せられた。

③学校サポート活動交流会

学校サポート活動支援グループのもうひとつの任務は、学校サポート活動を行っている学生同志の交流を図ることである。平成16年度は、毎月1回の自主ゼミを開いていた。(平成16年度教育実習専門委員会活動報告書 p.68参照)しかし自主ゼミに来る学生は200名の活動者の中の5名以下と少なく、このゼミの形態では学生同志の交流を図ることが難しいと判断した。これを踏まえ平成17年度は『学校サポート活動体験交流会』を計画した。学校サポート活動体験交流会は11月16日(水)の13時5分から14時35まで、A-306室で行われた。参加者は、学校サポート活動支援グループの3名と学生5名(障害児教育専攻4回生3名、理科教育専攻3回生2名)と決して多くはなかったが、活発な議論になっ

た。

交流会の概要

自己紹介の後、学校サポート活動について、次のような意見があった。

- ・学校サポート活動をして良かったこと
 - 小学生と触れ合ういい機会になった。算数の補助に入っていた。多動性の子どもがいて困ったことも多かったが、いい経験になった。
 - 基本実習で附属天王寺小学校に行ったが、今サポート活動に行っている学校とは全然違う。団地に住んでいる子どもたちが多く、両親は共稼ぎで、寝不足の状態に登校して来ることが多い。グループ活動を中心にしているが、プリントをなくす子、破ってしまう子など、いろいろな子どもがいた。
 - 難聴の補助ということで小学校に行ったが、休み時間など他の子どもたちと遊んだり、担任不在のときの学級の世話をすることもあった。
 - 実習は一時期だけであるが、サポート活動は1年を通じて行うので、いろいろな場面を経験できる。
 - いろいろな先生の授業を見ることができておもしろい。特に、高学年は教科担任制なので、先生の子どもへの接し方が大変参考になる。
 - サポート活動を進めるにおいて、卒業論文の内容とは直接関係していないし、大学の授業が直接役立っていると感じることは少ない。
 - ・学校サポート活動をして困ったこと
 - サポートの内容を、途中で変更されることがある。算数の補助ということで行った途中で理科の補助をすることになった。
 - 有効に活用されていないと感じるときがある。1時間、じっと見ているだけとか丸付けをして、できていない子の指導は担任がするということもある。たとえばその時間、その学級はテストをするのであれば、他のクラスに比べてサポート活動をさせてほしい。
 - サポートの内容の変更や準備物等の変更については、事前に知らせてほしい。当日に、補助に入っている子どもがプール水泳をするので、他の先生の水着を借りて、プールサイドにいたことがあった。
 - 「市に予算がないので、11月でおわり」と言われている。
 - 子どもに、どこまで関わっていいのかわからないときがある。たとえば、障害児の補助に入っているときに、ふざけている他の子どもの指導に入ったほうがいいのか、あくまで障害児のサポートをしていたほうがいいのか、迷うことがある。
- 大学スタッフからは次のようなコメントをした。
- 困ったことは教務主任か教頭など、サポート活動の担当者に相談すること。また大学には、学校サポート活動支援グループがある。
 - 緊急の連絡がまわるように、連絡網を整備しておく必要がある。
 - 大学にも、必ず学校との確認書を出しておくこと。

(3) 活動学生の状況

大阪府教育委員会から送られてきた『まなびング・サポート事業の実施状況整理表』に

よれば、平成17年度の本学学生のまなびング・サポート事業への参加者数は、209名（小学校178名，中学校31名）であり、平成15年度の161名，16年度の199名を超え、年々増加している。（平成16年度教育実習専門委員会活動報告書 p.65 参照）これら活動における成約の状況は、学生からの働きかけが圧倒的に多く、学校からの働きかけは52名，教育委員会からの働きかけは3名であった。活動状況を、以下の図で示す。

① 市町村別活動者数

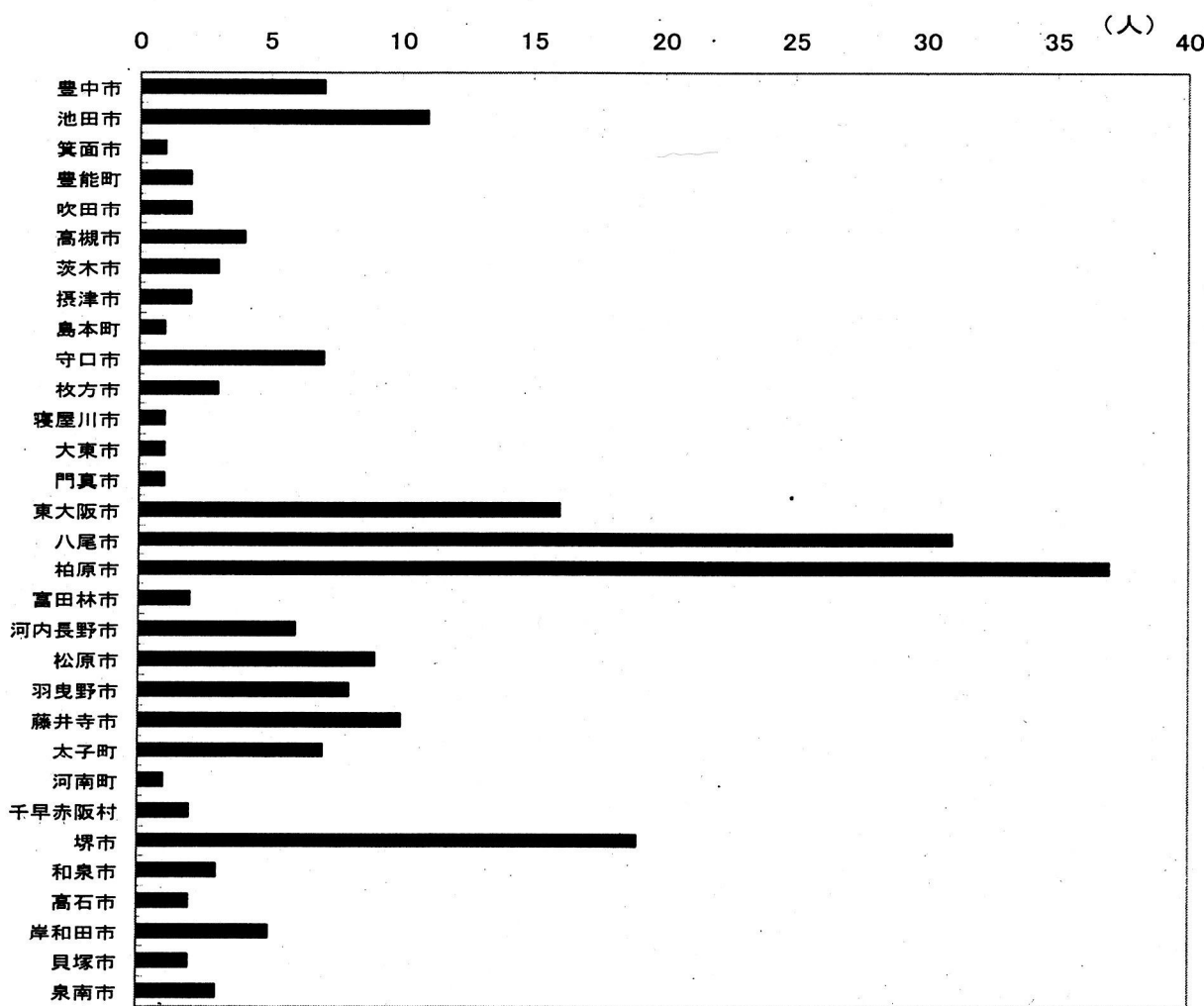


図7-1 市町村別活動者数

八尾市・柏原市など近隣の市に集中する傾向が見られる。本人の家の近くを選ぶより、大学の授業との時間のやりくりを考えた結果であろう。

② 学年別活動者数

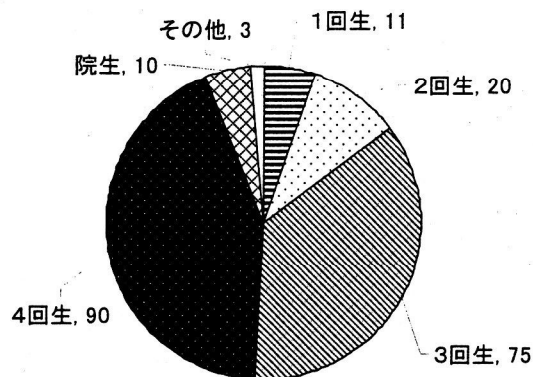


図7-2 学年別活動者の割合

4回生が最も多く、次いで3回生になっている。1回生は教職入門セミナー受講後という制約があるため、基本的に後期からのスタートとなる。このため参加人数が少ない。2回生は授業時間が詰まっているために、参加しづらい現状が現れている。

③ 活動回数

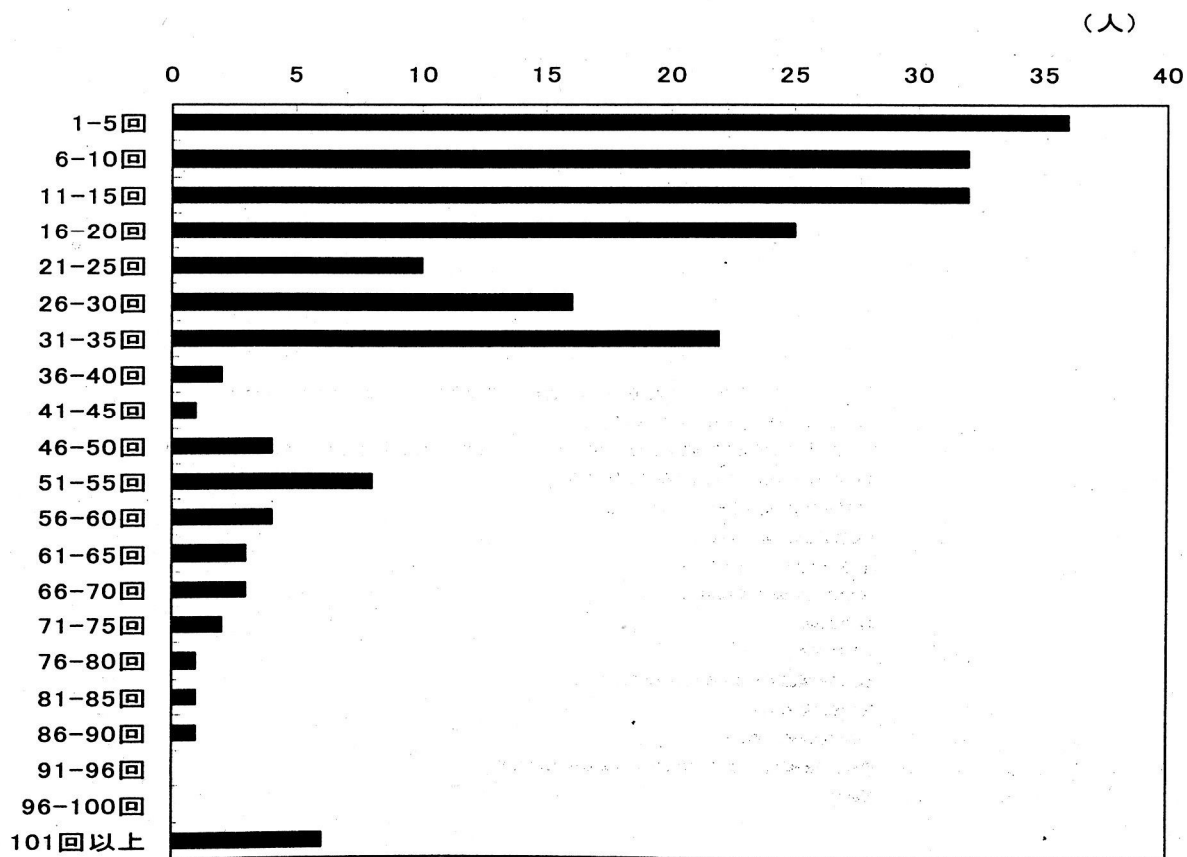


図7-3 活動回数

5回以下が最も多く、回数が増加するにつれていったん減少している。まなびング・サポート事業の2年目の平成16年度の聞き取り調査では、回数の少ない学生は、連絡した学校側に十分な受け入れ体制がなく、学校からの連絡を待たされているケースが多かった。今年度も、回数の少ない学生は同じ学校で活動しているケースが多いため、同様な事情が予想できる。25-35回で再び増加しているのは、予算措置の一人当たりの上限が32回であるため、上限をクリアした学生がここにいることになる。

④ 活動時間帯

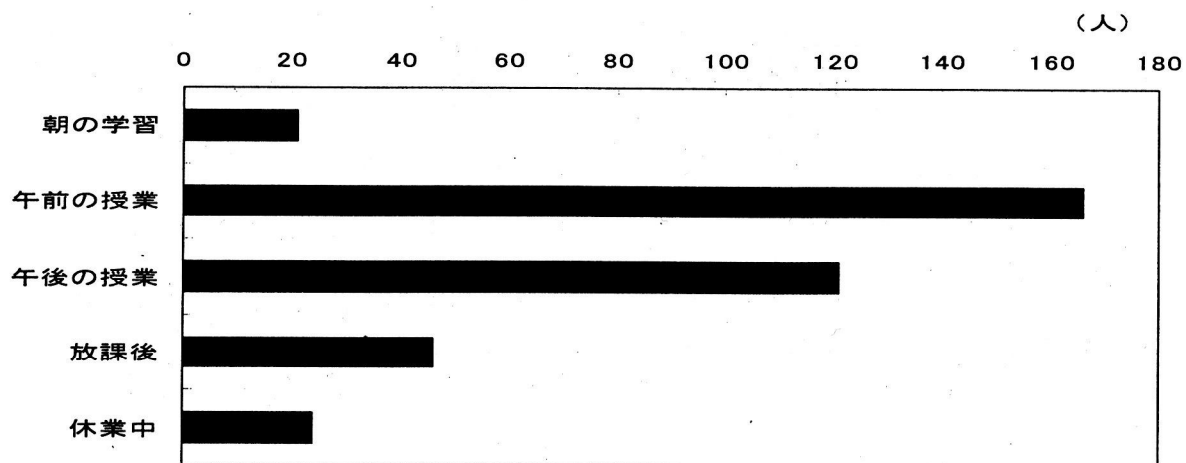


図7-4 活動時間帯

午前の授業が最も多く、次いで午後の授業となっている。授業の補助をしながら学校現場をまなびたいという学生の意識の表れである。

⑤ 活動内容

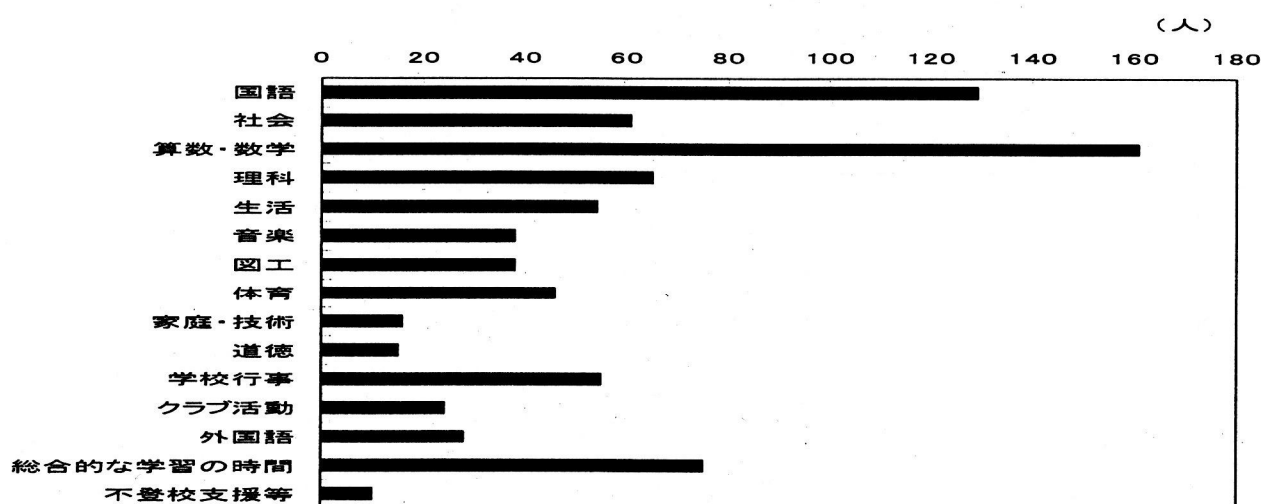


図7-5 活動内容

教科の授業補助が多い。ここにも本学学生の意識が表れている。

(4) 4 回生の活動状況

平成17年度学校サポート活動者209名のうち、4回生の占める割合は90名(43%)であった。「4年間の体系的な教育実習」では4回生の教育実習に学校サポート活動をあてている。そこで、平成17年度の4回生の学校サポート活動の状況について以下にまとめてみた。図表は後に一括して示している。

① 市町村別活動者数

多くの学生が活動しているのは、八尾市、柏原市、東大阪市、堺市、豊中市の順となっており、全体の多い順(柏原市、八尾市、東大阪市、堺市、池田市)と大きな違いは無い。大学に近いところで活動している。

② 活動回数

一番多いのは11~15回と16~20回で、次いで6~10回となっており、31回~35回に次の山がある。全体の活動回数のまとめと比較すると、活動回数が多くなっていることである。学校教育発展実習の単位化の指標は60時間以上の活動となっている。1回あたり4時間の活動としているので、15回の活動をすればこの条件をクリアすることになる。90名の4回生のうち、16回以上の活動回数をこなしているのは60名(4回生活動者のうち67%)となっている。60時間の条件を示すならば、恐らく11~15回の活動をしている学生はあまり無理することなく活動回数の上乗せは可能であろう。そうすると、81%の学生が60時間の条件をクリアできる。以上から、カリキュラムの改正無しに現行のカリキュラムで実施することを考慮すると、4回生にとって60時間の条件は難しいものではないと考える。

③ 活動時間帯と活動内容

これは、両方とも全体のまとめと大きな違いはほとんど無い。活動時間帯は午前中の授業が一番多く、次いで午後の授業でほとんどを占めており、活動内容は算数・数学が一番多く、次いで国語となっている。

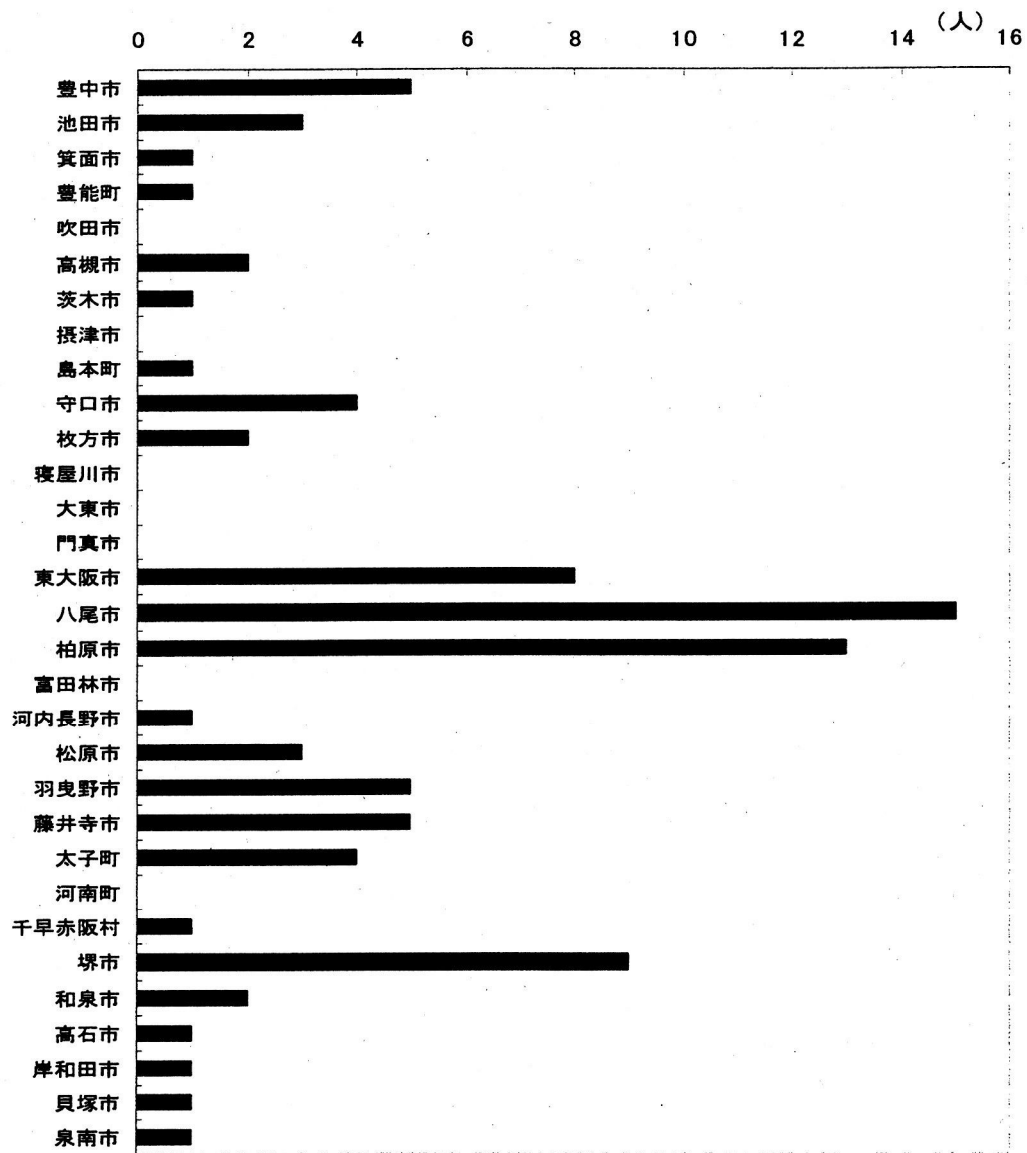


図7-6 4年生 市町村別活動者数

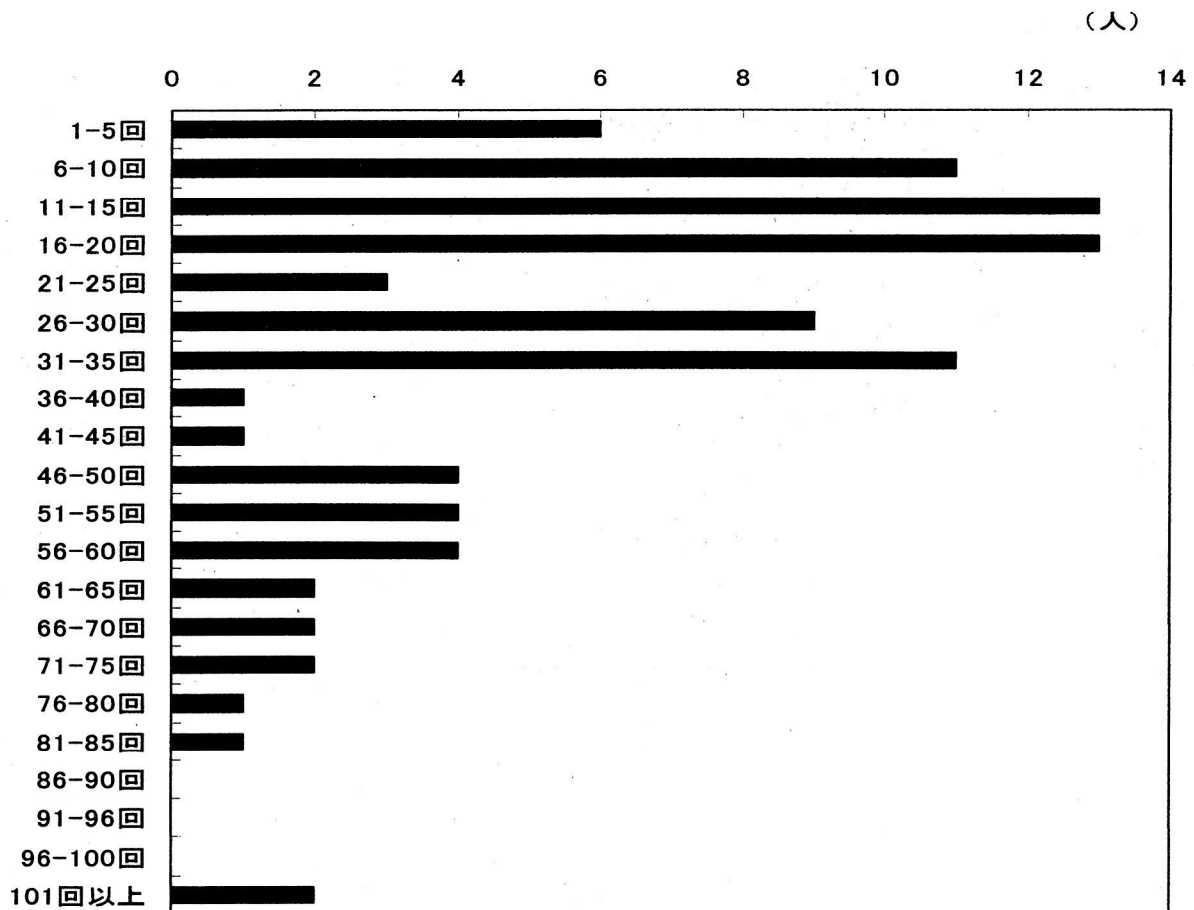


図7-7 4回生 活動回数

1回 = 4時間程度 (半日) を意味する。

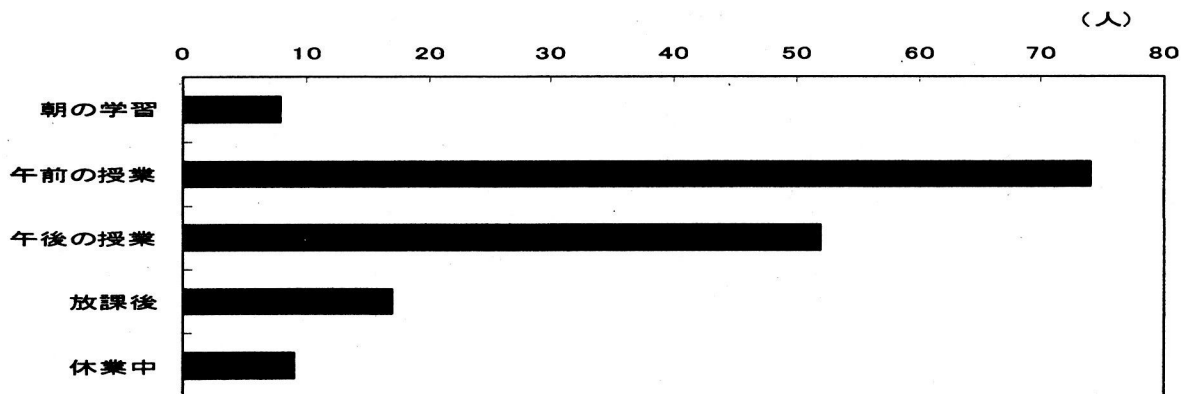


図7-8 4回生 活動時間帯

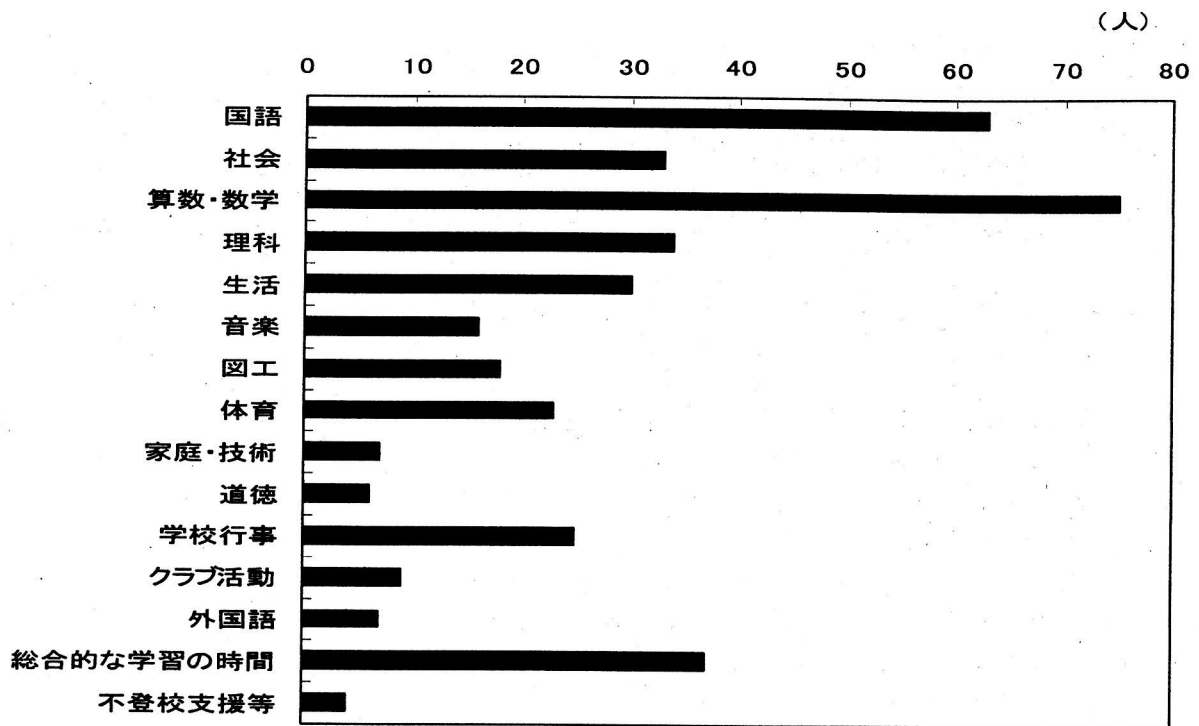


図7-9 4年生 活動内容

3) まなびング・サポート以外のサポート活動について

2)-(3)に記した活動状況(大阪府教育委員会のまなびング・サポート事業の実施状況)とは別に、本学の学生は柏原市の学校園支援活動ほか様々な活動に参加している。こういったサポート活動における活動名・自治体(教育委員会)・活動内容の一例を以下に示す。

柏原市学校支援活動(柏原市)	学習・部活・行事等の補助
学校インターンシップ(大阪市)	教科補助・校外学習等教育現場諸活動に参加
森林体験学習ボランティア(柏原市)	山の中の草木や虫などの観察
オガタ商店街フェスティバル(柏原市)	キッズマートの補助
大教キッズ・わくわく生活体験教室(八尾市)	おやつづくり・ものづくり
キャンプカウンセラー(藤井寺市)	センターの管理運営・企画運営等
こべっこランドボランティア(神戸市)	子どもと接するボランティア

これ以外にも、それぞれの学校や施設が主体となって行っている活動として、以下のようなものがある。(平成16年度教育実習専門委員会活動報告書 p.104-106 参照)

放課後チューター(太子町立中学校),

学習ボランティア(児童養護施設・武田塾), 不登校児支援(適応指導教室・くすのき教室)

カウンセラー(大阪府立総合青少年野外活動センター),

キャンプカウンセラー(堺市立鉢ヶ峰青少年キャンプ場, 堺市青少年活動振興協会);

学生ボランティア「スマイルフレンド」(泉大津市教育研究所)

これらの活動で平成16年度以降に、本学に依頼があったものについて、章末の表に記す。これで全てかどうかを把握しているわけではない。特に学生の参加状況をほとんどつかんでいない。それでも118件と非常に多くの事業で、ボランティアを求めている実態がある。本学の学生はこういった様々な活動に参加していることは、学生の発言から推測できる。

4) 今後の課題

現在、上記のような数多くのボランティア活動に対する学生の募集が本学の複数の窓口を通して寄せられている。これらを一括する『ボランティア活動センター』といったものは未だに本学に設置されていないのが現状である。

一方、大阪府教育委員会の『まなびング・サポート事業』は、平成17年度で終了する。これに伴い、これまで大阪府教育委員会が行ってきた

- 市町村からのサポートに関する需要・大学からの要望や学生の情報等の収集や提供
- 市町村教育委員会と大学との間の連携システム構築の促進・連携状況の把握
- 学生を派遣する大学の数を増やしていくこと
- これらすべての情報更新